

柳井迪雄名誉会員のご逝去を悼む

本学会名誉会員、柳井迪雄カリフォルニア大・ロスアンジェルス校 (UCLA) 名誉教授は、10月13日急性心不全により急逝されました。全く突然の出来事で、前日まで2日間奥様と一緒に旅行を楽しまれるなど普通にお過ごしだったと伺っています。私自身にとってもその2週間ほど前、シアトルで行われたワシントン大学のウォーレス・シンポジウムで一緒に、2日間ゆっくりとお喋りしたばかりでしたので、その余韻を残している頭ではとても信じられない思いです。

柳井さん（1年後輩の仲間として長くお付き合いしてきたので、こう呼ぶのをお許し下さい）は、1956年東京大学理学部を卒業して、同大学院に進み正野重方教授を中心とする気象研究室で研究生活を始められました。もともと湘南高校の生徒だった頃から気象に興味を持ち「お天気クラブ」を作るなどしておられたので自然な進路選択であったと思います。博士課程に進んだ時に正野教授から与えられたテーマは「台風」でした。色々文献を調べた上、台風の発生過程をデータ解析で調べる事に決め、気象庁予報課の人などから聞いて発生事例を選び解析を進められました。府中にあった米空軍基地の気象担当将校バンガード博士の助けで貴重なデータを得、さらに「ここはあるはずだ」と見当をつけた外国の機関に手紙を出すなど徹底的にデータをまとめておられました。可能な限り「観測データ」に立って現象を記述しメカニズムを解析する、という研究スタイルはこうして生まれその後も一貫していたと思います。

1961年に博士論文として提出されたこの研究において、台風の暖気核が積雲対流による凝結の潜熱をもとに形成される過程を調べるのに、台風スケールの中で見た「みかけの熱源Q1」と「みかけの水蒸気消滅Q2」を導入して解析を進められました。この研究手法は後に70年代UCLAでの対流パラメタリゼーションの解析に引き継がれ、それをきっかりにQ1, Q2という記法ごと熱帯気象研究のグローバル・スタンダードとなりました。この研究で1962年日本気象学会賞を受賞され、また1959年の伊勢湾台風がきっかけで



気象研究所に新設された台風研究部に就職されました。

気象研究所在籍中、1963～64年の間、H. Riehl 教授に招かれコロラド州立大に滞在され、この間多くのアメリカの研究者と知己になり、特に Bill Gray 博士と親しくされて帰国後、日本学術振興会の日米科学協力研究のプログラムにより彼を東京に招聘されました。アメリカでの経験から、日本の研究システムや学界のしきたりの革新にも意欲を燃やしておられましたが、本学会にとって最大のものはJMSJ（当時の気象集誌）の編集にレフェリー制を導入された事です。表紙デザインにも気を配り国際誌として成長する基礎を作って下さいました。1965年、東大の都田菊郎助教授がアメリカのGFDLに移られた後任として助教授に就任されました。当時、赤道成層圏中の東西風の準2年周期振動(QBO)が世界の研究者の注目を集めていました。この不思議な現象で運動量収支の鍵を握るはずの「擾乱」を見つける努力が、柳井さんの率いる東大グループとWallaceの率いるワシントン大学のグループによって精力的に行われ、それぞれ西進する混合ロスビー重力波(Yanai-Maruyama waveとも呼ばれる)と東進するケルビン波とを発見したのでした。柳井さんは、成層圏の波動にとどまらず、大学院生(時に柳井スクールと呼ばれる)を指導して広く熱帯の擾乱を包括的に調べ、新しい熱帯気象を開拓して

行かれました。まだ「ひまわり」のない時代で、この時のデータは、米国が太平洋で核実験を行った1950年代の特別観測によるもので、以前から研究室の書棚に積まれたままのものでした。

1970年に柳井さんは東大を離れ J. Bjerknes 教授の後任として UCLA に移られました。一つの動機は、当時 GARP が始まり、その中で柳井さんが夢見ておられた熱帯太平洋での総合的な観測プロジェクトが実現する可能性があった事（国際政治の要請から大西洋に移り、GATE となった）、もう一つは1968~69年の大学紛争であったと聞いています。UCLA では GARP の委員を務めながら、同じ UCLA の荒川昭夫教授が考案されたばかりの積雲パラメタリゼーションを観測データで検証する仕事に取り組みました。先の Q1, Q2 による解析がぴったりなので、荒川教授と絶妙のコンビであったと思います。また東大時代と同じように、その中で多くの大学院生を育て上げられました。

日本を離れてからは私自身の研究テーマとの違いもあり、柳井さんのお仕事に関して十分な材料を持っていませんが、その後の研究で最も重要なのはチベット高原上の気象の解析でしょう。アメリカで研究者層の厚くないこの分野で先駆者の役割を果たされたと安成哲三さんから伺いました。まだ多くの未知があり、生の直接観測データを扱わないとわからないという点が柳井さんを惹き付けたのでしょう。このような多くの業績に対して1986年アメリカ気象学会の Jule G. Charney Award を受けられました。また、1993年に本学会の藤原賞を受けておられます。柳井さんの最近の活動で最も重要なのは UCLA Tropical Meteorology and Climate Newsletter の発行でしょう。先に JMSJ の改善のことに触れましたが、柳井さんは研究そのものと共にそのシステムにも関心を持っておられましたが、e-science の時代に早速新しい形での研究推進のため（と同時にご自身の強い好奇心にかき立てられ）1996年からこの仕事に大きなエネルギーを割い

て来られました。柳井さんの広い知識と確かな判断のもとに作られ発行された Newsletter は世界の熱帯気象コミュニティに広く受け入れられ、貢献して来たと思います。

柳井さんは、研究に全力投球で臨まれましたが、同時に社会の出来事や文学など幅広い興味を持つ教養人でもありました。大学院の頃から研究の議論と同様に、時事問題をはじめ色々な話題でご自分の考えを持って皆と議論（お喋り）し、それを楽しんでおられました。アメリカに行かれてからも同様だったとみえ、学生だった人が柳井さんから学問以外の事も教わったと感謝しています。私も共通する所で、柳井さんとお喋りは文字通り時を忘れる楽しみでした。奥様から二人ともお喋りだから、と評された事もあります。陽子夫人は地球物理学科の同級生で、卒業後気象庁への就職も考えられましたが、当時のことで「女性には図書の仕事なら」と面接官に言われて断念し、教職に就かれたと伺いました。アメリカでは、あらためて勉強して公認会計士の資格をとり、仲間と事務所を持って今も仕事を続けておられます。

アメリカ気象学会では柳井さんの長年にわたる研究をまとめ、業績を顕彰するためシアトルで行われる2011年の総会の期間に柳井さんの名を冠したシンポジウムを開催する事を決めました。柳井さんは心から喜ばれ、その教えを受けた何人かが一生懸命準備をしているのを見ながら、その日が来るのをとても楽しみにしておられました。それだけに2011年1月27日に行われるその会が“Michio Yanai Memorial Symposium”となってしまったのは痛恨の極みです。この半年ほど、このシンポジウムに関連して、また、ご急逝に際して飛び交わされたメールを見て、柳井さんがこんなにも多くの（相対的）若手に尊敬され親しまれていたかと感じ入っています。柳井さんが開拓され残された熱帯気象学が彼ら・彼女らの手により更に大きく発展することと信じます。

（松野太郎）